

三月二十日の春分はつかの日は、二十四節気にじゅうしせつきのひとつで、昼と夜の長さが等しくなる日。また、自然をたたえ生き物をいつくしむ日である、と辞書じしょにはあります。

そして、春分の日とその前後三日をあわせた一週間は春のお彼岸ひがんえ、彼岸会です。

お彼岸は、春と秋にあることはみなさんご存じのことでしょう。「暑さ寒さひがんも彼岸まで」という言葉には、厳しい夏の暑さや冬の寒さゆるが緩み、過ごしやすい季節がやってくるという人々の思いが込められています。

「入り牡丹餅ぼたもちに明け団子だんご」。お彼岸の入りには牡丹餅を、そしてお彼岸の明けにはお団子を食べるといふ風習も昔からいわれてきているものです。また、春分の日であるお彼岸のお中ちゅうにち日に、小豆飯あずきめしを食べるといふ習しゅうかん慣かんもあります。

同じ食べ物のことを、春には「牡丹餅」、秋には「お萩はぎ」といいます。どちらも小豆を煮てあんこにし、お米を炊いたものを軽くついて小さく丸め、あんこをつけて作るものが一般的ですが、地方によりさまざまな特色があるようです。

季節により同じ食べ物しゅんかしゅうとうの名前が違ちがうことも、春夏秋冬のある日本ならではのことでしょう。実は牡丹餅の夏と冬の別名もあるのですが、ぜひみなさんで調べてみてください。日本人ふぜいの風情が味わえることでしょう。

彼岸会ひがんえは、仏教行事の中でも日本独自のもので、彼岸会の行事は、平安時代から始まり、江戸時代に一般的になりました。

お彼岸の一週間は、善い行いをして功德くどくを積むという修行期間として大切なものです。菩提寺ぼだいじのご本尊さまにお参りをして住職に挨拶をし、そしてご先祖さまのお墓を掃除して、亡き人のためご先祖さまのためにお線香やお花などを供えてお墓参りをす、これだけでも修行をしたことになるのです。

しかし、本来この修行は、お彼岸の期間だけ行えばよいわけではありません。普段からそのような真まごころ心をもって生活していくことこそが、充実した人生につながっていくのです。

今私たちがいただいている命の尊さや命のつながりを再確認し、普段からお寺参り

やお墓参りをするを習慣にして、供養の心を育てていきたいものです。

仏様やご先祖さまに対し、報^{ほうおん}恩と感謝の心をあらわすお墓参り。

今日のこの良き日、ご家族一緒にお墓参りをしてみてはいかがでしょうか。

— 終 —